

初代尾張藩主・徳川義直の思想と思想像の変遷

森 川 夏水乃

はじめに

名古屋市中昭和区に尾張藩主を祭る尾陽神社がある。

この神社には、天照大神とともに、「徳川義直命」と「徳川慶勝命」という二人の尾張藩主が祭られている。義直は初代藩主で、学問や武芸に通じ、尾張国主として治政を行った人物である。⁽¹⁾「源敬公」「敬公」とも称される。そして、慶勝は一四代藩主で、隠居後も実権を握って幕末の政局にあたり、慶応四年（一八六八）鳥羽伏見の戦いの直後、佐幕派の家臣を処断し、朝廷に恭順して「官軍」にくみした人物として知られる。⁽²⁾二人の藩主在位期間のあいだには二百数十年という長い年月があるのだが、なぜ、この二人が祭られているのだ

ろうか。

尾陽神社のホームページ⁽³⁾によれば、名古屋開府三百年記念事業のひとつとして、明治四三年（一九一〇）に愛知県と名古屋市の合同で創建され、県社に列せられた、という。「名古屋開府」というのは、慶長一五年（一六一一）清洲越を起点としており、尾張藩開府から三百年の記念行事ということである。「県社」とは、戦前の社格の一つで、官弊社 国幣社 県社 郷社 村社という序列の三番目の格式である。もとは、名古屋市中区の東照宮に合祀されていたが、大正一三年（一九二四）、現在の昭和区御器所に遷座した。天照大神を祭神として迎えたのは、戦後、昭和二四年（一九四九）であるという。

開府記念であれば、初代藩主・義直が祭られるのは当然で

あろう。だが、一方の慶勝は、いま述べたように、勤王に舵を切った人物である。また、戦後ではあるが、天照大神が迎えられたことから、勤王色が感じられる。

実は、義直の伝記はいくつもあるが、研究書・論文はそれほど多くない。特に思想についての分析は少ない。その理由のひとつは、西村時彦著『尾張敬公』にあると考えている。

この本は、尾陽神社創建と同年に刊行され、出版は「名古屋開府三百年記念会」となっている。

あとで詳しくみるが、西村はジャーナリストであり、文学運動を牽引し、最後は漢学者となった人物である。『尾張敬公』は、義直の著作によく取材し、特定の思想、例えば勤王につながるような神道思想に偏ることなく、義直の思想の全体像を明らかにしている。そして、儒学思想にもボリュウムが割かれており、これは西村が晩年『日本宋学史』という儒学の研究書を著していることと無縁ではないだろう。

ただし、西村は、『尾張敬公』を締めくくるにあたり、「尊皇」という章を設けている。そこで、慶勝が慶応三年（一八六七）十一月八日、南朝の忠臣・楠木正成を祀る神社建立建議を朝廷に差し出し、翌年戊辰戦争のさなかの四月二十八日、

湊川神社創建案が採用されたことを重視し、「敬公尊皇の誠は、実に立公に発して文公に成れり」と高く評価する。「立公」とは四代藩主・吉通で、「文公」が慶勝である。つまり、西村は尾張藩が「官軍」についたことを肯定し、吉通を経由して、慶勝によって義直にはじまる尾張徳川家の「尊皇」が完成したとする。

『尾張敬公』は販売された本ではなく、「名古屋開府三百年記念に方り記念会は藩祖敬公の遺徳を頌せんが為め本書を出版し記念会員に頒てり」とあるように、三百年記念会会員に配布したものであった。すでに述べたように尾陽神社の創建も開府三百年記念事業であり、神社の建立と『尾張敬公』出版は連動しているとみて間違いないであろう。

その後の義直関連の出版物では、必ずといっていいほど『尾張敬公』が参考文献に挙げられている。『尾張敬公』は、画期的な義直の思想研究書であり、この本を超えるものがないというのが、義直の思想研究が少ない要因と考えられるのである。『尾張敬公』以降の出版物は、義直の思想の勤王色がより強められていく、という傾向がある。その背景にはもちろん戦前の「皇国史観」があるのだが、実は、勤王家義直

という思想像は、すでに江戸時代から確立していた。

本稿では、まず、江戸時代の尾張藩において、どのように義直の思想像がつくられ、また、その思想像が展開したのかをみていきたい。

その際に注目する史料は、義直の著書『軍書合鑑』である。その最終章「依_二王命_一被_レ催軍」の解釈をめぐる問題がある。この解釈に大きな影響をあたえたのが「円覚院様御伝十五ヶ条」という史料である。著者は近松茂矩。「円覚院」とは、四代藩主・吉通の院号である。近松は、「依_二王命_一被_レ催軍」について、もし、内乱が起こり、朝廷により「官軍」が立ち上げられた場合、吉通の意向は「いつとても官軍に属すべし」であったと解釈している。この解釈はあたかも、幕末の尾張藩の動向を肯定する根拠のようであり、また藩祖の勤王家という思想像を創出しているといえよう。

勤王家と関連して国学者としての義直という思想像が存在する。それを作り出したのは、尾張藩における幕末期の本居派国学者・山田千疇の「国美論附録」である。

こうした勤王家や国学者とは別な思想像も存在する。それは、儒学や軍学を重視し、徳川御三家とされる、尾張藩以外

の紀州藩・水戸藩、徳川頼宣・徳川光圀を視野に入れた田宮半兵衛の『敬公遺事』である。田宮の史料を分析することで、義直の思想の多様性を明らかにしたい。さらに、このような江戸時代の義直の思想像が、明治維新以降、どのように変遷するのかをみていきたい。

そして、最後に、思想像ではなく、義直自身の思想を探る。その際に着目するのは、義直の著作のうち、『軍書合鑑』、『君戒』、『初学文宗』という軍書と子孫に遺した庭訓書である。なぜ、これらの書物に着目するのか、といえば、江戸時代は「家」の時代であり、「家」の存続が重視された時代であるからで、大名家といえども例外ではない。義直は初代尾張徳川家の当主であり、自分が確立した「家」の存続を歴代藩主のなかでも最も強く望んだのに違いない。とすれば、子孫に語り遺したこれらの書物にこそ、尾張徳川家にとってどんな思想や心構えが重要と考えていたのか、義直の意識・思想を解明する鍵があると考えられるのではないか。

なお本稿では、史料引用中、旧字は新字に、変体仮名はひらがなに改め、ルビについては煩瑣になるため、適宜省略した。また、傍線・波線・囲み線などは筆者によるものである。

割注については「」で囲んだ。

一 尾張藩における義直の思想像

1 「依王命被催軍」と「円覚院様御伝十五ヶ条」

「はじめに」で触れたように、義直の思想像の形成において、殊に勤王家という思想像において、『軍書合鑑』最終章「依王命被催軍」の問題がある（以下、「依王命」と略す）。この解釈に大きな影響をあたえたのが近松茂矩の「円覚院様御伝十五ヶ条」という史料である。

あとで見ると、近代以降の『尾張敬公』をはじめ、多くの義直に関する出版物では、この『軍書合鑑』「依王命」の部分から義直の尊王や勤王の精神を導き出している。それらの解釈は、遡っていくと、結局「円覚院様御伝十五ヶ条」に帰着する（以下、「円覚院」と略す）。円覚院こと吉通は武芸を好み、軍学を修め、儒学を講じ、加えて医書に通じていた人物である。「円覚院」は明和元年（一七六四）九月二六日成立。吉通の奥小姓を勤めていた近松が記したものである。この史料の後書によれば、近松が一七歳のときに吉通から見

聞いた内容を、五二年たつて回想して記したものであるという。

近松自身は後書で、見聞から半世紀余りという長い歳月が流れており、当初の真意が誤っている、もしくは、記憶に何らかの変化があるのではないか、という恐れがあると述べている。この後書から、吉通本人の意見がどこまで反映しているのか、疑ってみる必要があるといえるだろう。逆にいえば、近松の作為が反映している可能性も考えられる。

では、まず『軍書合鑑』の「依王命」は、どのように記されているのかを見てみたい。

夫催二応シテ軍ヲスルトキハ常ノ義ニスコシ異リ、異リト云フハ、味方大軍ニシテ王ノ命アリトイヘトモ諸將心ナリ、故ニ軍ヲセント見ツクラウトキハ人先ヲスル、故ニ吾武コレニヤトルコレ生涯ノヒケナリ、手勢ヲミタサル、軍ノ次第々々追テハヤク軍ヲスヘシ、是モヨホサル、軍ノ大法ナリ、シカレトモ敵ヨキ險阻ヲ前ニアテ、シカモコハクハ、君ニ使ヲツカハシ告ヘシ、其下知ニヨツテ軍ヲスル、コレモ一ツノ法ナリ、此道ヲ常ニヨク慮ルヘキコト也、軍ヲスルハ医師ノ病ヲ治スルカ如シ、

古今ノ書ヲ考ヘテ療スト云ヘトモ、病ヲ見ルコトアヤマ
ルトキハ、カヘツテ大キナルアヤマチアリ、兵ヲ用ルモ
ノ軍ヲ見ヲホセス、モツハラ書ヲ用ヒテ軍ヲセント思ハ
、敗ヲ取ヘシ、此書ヲ見ル者ヨク其慮リヲナスヘキ事也⁹
ここで注目したいのは、傍線部の「王」という言葉である。

「王」とは何か。近世日本には二つの王が並存していた。

將軍と天皇である。この「王」は、果たしてどちらを指して
いるのだろうか。岸野俊彦は「王」は日本・中国を通じてた
普遍的「王」概念であり、どのように解釈するかは、解釈す
る側の主体の存在形態に規定されている¹⁰としている。つま
り、「依王命」の示す「王」は、具体的に將軍か天皇かでは
なく、抽象的な概念として用いていると述べている。傍線部
は、味方が大軍であるため、王の命令があつても諸將の心は
様々であるから、まずは人より率先して先頭に立つべきだとい
うように解釈できる。つまり、この部分から具体的に義直
の尊王や勤王の精神を読み取ることはできないのである。

岸野が述べているように、この「王」を天皇としているの
は、著者である義直自身ではなく、「王」を解釈する側の意
識・思想による。では、近松の「円覚院」では、「王」をど

のように解釈しているのだろうか。

御意に、源敬公御撰み軍書合鑑卷末に、依「王命」被^レ
催事といふ一ヶ条あり、但し、其戦術にはさしてこれは
と思ふ事も記されず、疎略なる事也。

然れども、これは此題目に心をつくべき事ぞ。其子細
は、当時一天下之武士は、みな公方家を主君之如くにあ
がめかしづけども、実は左にあらす。既に大名にも、国
大名といふは、小身にても、公方の家来あいしらひにて
なし、又御普代大名と云は、全く御家来也。三家之者は
全く公方の家来にてはなし。今日之位官は、朝廷より任
じ下され、従三位中納言源朝臣と称するからは、これ全
く朝廷の臣なり。されば水戸の西山殿は、我らが主君は
今上皇帝なり。公方は旗頭なりとの給ひし由、然ればい
かなる不測の変ありて、保元・平治・承久・元弘のごと
き事出来りて、官兵を催される事ある時は、いつとてモ
官軍に属すべし。一門の好みを思ふて、かりにも朝廷に
むかふて弓を引事あるべからず。此一大事を子孫に御伝
へ被^レ成たき思召にて、此一ヶ条を巻尾に御記し遺され
たりと思ふぞ。¹¹

『軍書合鑑』「依王命」と「円覚院」を比較すると、内容が大きく異なっていることがわかる。「依王命」では、軍が催されたところから始まっているが、「円覚院」では驚くべきことに戦術論としてはみるべきものがなく「疎略」としている。そして、「依王命」にはない、朝幕関係論をベースに論じている。大名たちが「公方」＝將軍を「主君」のように崇めているが、それは違うという。特に尾張・紀州・水戸のいわゆる御三家は、將軍家の「家来」ではないと述べている。

さらに、武家官位に注目して吉通の官位である「從三位中納言」は朝廷から賜り、「朝臣」である以上、朝廷・天皇の臣下であるという。さればこそ、御三家のなかの一つ、水戸藩の徳川光圀は、自分たちの「主君」は現在の天皇であり、將軍は武家の棟梁として、「官軍」を率いるべきだ、という。

このように「円覚院」では、「依王命」を「朝廷にむかふて弓を引事あるべからず」「官軍に属すべし」と、天皇の軍隊に属するべきだと主張している。

すでに述べたように、「円覚院」は吉通の言行を近松が書き留めたという体裁をとっている。つまり、吉通が具体的に尾張藩主がとるべき行動を示したことになるが、この

解釈は近松の意識・思想を吉通に託して示しているように考えられる。

この解釈は、あとでみるように、比較的近年に出版された櫻井芳昭『幕末の尾張藩』に踏襲され、「円覚院」に引つ張られて、吉通の発言という前提からそれで、義直が「官軍」につくべきだと発言しているというようにされている。つまり、「円覚院」は近年に至るまで強い影響力をもっている。

2 山田千嘯「国美論附録」における思想像

前節では、『軍書合鑑』「依王命」の「円覚院」の解釈によって、義直の勤王的な像が作爲されたことをみてきた。ここでは、「依王命」から離れて、幕末において義直の思想像が作爲されていることをみていきたい。それは山田千嘯¹²⁾が著した「国美論附録」（以下「国美論」と略す）である。

山田は文化九年（一八一二）生まれ、尾張藩の本居派国学者である。天保期に植松茂岳に国学を学び、国学を教えるようになった。その後、植松の推薦があり、安政四年（一八五七）に召し抱えられ、のち、藩校明倫堂の教導・助教見習となり、明治維新後は、神祇改役見習、神社改訂御用専引受、

皇学二等助教といった役職を歴任した。山田は「いつまで草」「棕園雜記」「安政録」「時事録」などの、幕末維新期の尾張藩に関わる大量の情報、岸野によれば「日記風記録」を残し、明治九年（一八七六）に没している。

本稿で注目する「国美論」はいま触れた『棕園雜記』の一部で、慶応三年（一八六七）五月に成立した史料である。すでに岸野により、「国美論」にもつき、「近世国学の開基は初代尾張藩主義直だと主張」されていたことが指摘されている。¹³ 具体的に確認しておこう。それは次の箇所である。

○或人此国学ト云ハイツヨリ起リタル物ゾト問ケルニ答ヘケラク、当特国学ノハジマリツル其根本ハ、カシコクモ吾故君源敬公ノ御特ヨリ始マリヌ、サルハ敬公類聚日本紀神祇宝典等ヲエラハセ玉ヒ、次ニ水戸ノ故君西山公大日本史ヲカ、セ賜ヒ（中略）切ソノコ口大坂ニ契沖ト云阿闍利アリキ、此人法師ナレトモ皇国学ビヲヨク為シ人ニテ、西山公深ク信用シ賜ヒ（中略）次ニ遠江ノ国ニ賀茂真淵ト云ヘルアリキ、此人モト荷田東麻呂ト云人ノ弟子ニテ、後ニ江戸ニアリテ国学ニヨリテ田安家ニ仕ヘマツリ（中略）次ニ其本居宣長翁是ハコ

トニ国学ニヌケ出タル人ニテ、後ニ紀ノ故公一位ノ君ニ仕ヘマツリ（中略）是ヲ世ニ三哲ト称シテコノ三人ニテ、国学ハ開ケタルモノ也、其モトヲ云ヒモテユケバ西山公トモ云ヘケレトモ、敬公ゾ中古国学ノ開基ニハマシ／＼ケル¹⁴

傍線部のように、国学の始まりを義直としている。その根拠は、岸野が指摘しているように、義直の編纂物である『類聚日本紀』『神祇宝典』である。¹⁵ これらを根拠にして「中国学ノ開基」と強調している。『類聚日本紀』は『日本書紀』から『日本三代実録』までの六国史を年代順に編纂したものであり、『神祇宝典』は日本の主要な神社を国郡別に並べたものである。「次ニ」徳川光圀による『大日本史』が編まれたと述べているように、この二書は『大日本史』の前編にあるとされている。¹⁶

「世ニ三哲ト称」されている国学者は、契沖・賀茂真淵・本居宣長であるという。¹⁷ 山田はその三人を、いわゆる徳川御三家・御三卿と結びつけ、徳川光圀が契沖¹⁸を重用し、賀茂真淵が田安家に仕えたこと、そして国学者として抜きん出た本居宣長が紀州徳川家に登用されたことを挙げ、この「三哲」

により国学が勃興したという。世間では国学を開いたのは光圀といわれているが、実は、義直こそが「中古国学ノ開基」であると主張している。

以上のように、岸野の論考に基づき、国学の祖・義直という像がつくられた経緯を具体的に確認した。では、こうした国学者像は、山田のどのような意識・思想によって造り出されたものなのだろうか。それを「国美論」からみていきたい。

皇大御国ニ生レテ、皇国学ビヲ知ザルハ、吾内ノ事ヲ知ラヌニテ、恥辱ノ至リ也、申スモ古メカシキコトナレトモ、西土ニテモ人ノ本朝ニ立テ道ヲ知ザルハ恥ナリト云ヘルニ非スヤ、然ルニ外ノ学問ノミシテ内ノ学問セザルハ恥ノミナラス道ノ本末モ違ヒテ理ニ背ケリ、今外夷入来ル世ニ成テハコトニ内ノ学問ナリシテハ、事ニヨリテ八国辱ヲ招クヤウナル事モ出来ヌヘシ（中略）異人日本ハ何ヲ以テ道トスト云ケレハ、孔夫子ノ道ヲ以テ道トスト答ヘタル由承リ居ヌ、是ハ大ナル国辱ニテ口惜キノ至リ也¹⁹

まず、傍線部のように、日本を「皇大御国」と呼んでいることに注目したい。水野雄司によれば、「皇大御国」は本居

宣長の造語で宣長の『直毘靈』において登場するという²⁰。「皇国学ビ」を知らないことは、即、「吾内ノ事ヲ知ラヌ」、つまり、日本について無知であり、「恥辱」であるという。

この背景には岸野が指摘しているように「西洋流繁昌」という「洋学」に「国学」が押されているという危機意識があるだろう。尾張藩における「洋学」はすでに一八世紀後半に蘭学がはいってきており、化政期には吉雄常山が天文・暦学・医学や化学の分野に「洋学」を広げ、幕末には上田仲敏を中心とする洋学社中と植松や山田の国学社中が激しい鏖迫り合いをしていた²¹。

山田は開国により欧米の人や文物が流入してくることを日本の文化的危機として捉える一方で、自国の学びである「国学」を称賛している。また波線部では、山田は欧米人に対して、日本の「道」を問われた者が、「孔夫子ノ道」＝儒学と答えたことを「国辱」と残念がっている。

興味深いことに、こうした「洋学」への激しい批判、警戒意識は、必ずしも国学者義直という像を純化するとは限らない。たとえば、次の箇所である。

是マデ三百年近クモ泰平ウチツ、キ、人民安堵ニ暮ラシ

ハ、有ガタシトモ有ガタキ御事ナリ、然ルニ上ニ云ヘ
ル洋学、コノウヘ天下ニハビコリテハ、弥其風推シウツ
リハテくハ君臣ノ道ヲモ失ヒ、利ニノミワシリテ、終
ニハ犬羊国ト成ヌヘシコ、ニ、吾先公大納言ノ君ハ、カ
シコクモ源敬公ノ神靈ヤ幸ヒ賜ヒケム、洋学ニハカタヨ
リ賜ハデ、有キタリタル和漢ノ学問ナラヒ来タル、弓馬
劔鎗ヲ主トシ賜ヒ、此ホドハ又一際御心アツク励マシ賜
フハ、イトモく有カタキ御事ドモナリ、他国ノ洋学者
流ナドハ後レタリ、旧習也ナド云ベキモ有ベカンメレド
モ、皇国ハ古ヲ尊ミ旧キヲシタソ国風ナレバ、旧習コソ
オムカシケレ後レタリナド云フハ、却リテ笑ヘキノ至リ
ナリ⁽²²⁾

このころの尾張藩主は一六代徳川義宣である。傍線部の
「先公大納言」は前の一五代の徳川茂徳を指していると思わ
れる。その茂徳が義直の精神を受け継ぎ、日本の伝統的な学
問である国学と漢学を学び、そして「弓馬劔鎗」といった武
道に嗜んでいることを褒めている。なによりも、「洋学ニハ
カタヨリ賜」わないことが重要なのである。儒学が国学かとい
う点では、儒学を排撃している。しかし、対洋学という土

俵では、伝統的な和漢の学問と武道を尊ぶ義直像が語られて
いる。この点は、後で見えるように、庭訓にみる義直の思想と
近い。

3 田宮半兵衛『敬公遺事』における思想像

ここでは、勤王家や国学の祖とは別の義直の思想像を検討
する。取り上げる史料は『敬公遺事』である。中京大学文学
部所蔵の『敬公遺事』には書写した人物の前書と奥書がある。
まず、奥書をみてみよう。

敬公遺事一卷は田宮氏の「俗称半兵衛諱翼、御用人にて
町奉行兼、古希にして没」書集座右に秘し置れしを予深
く心得て写し置ぬ、翼は子孫我素意を勿軽と云爾干時天
保四年癸巳初夏下浣官余之曰（印）⁽²³⁾

奥書から、『敬公遺事』の著者は、用人にして町奉行を兼
帯した田宮半兵衛であつたことがわかる。田宮はこの書を秘
蔵していたという。田宮は尾張藩で町奉行をはじめ、様々な
役職を勤め、名奉行として知られていた人物である。田宮の
没年は天保三年（一八三二）。その後、田宮如雲⁽²⁴⁾が養子に入
り家督を継いだ。如雲は父と同じく町奉行といった職務に取

り組み、尊攘派の金鉄組の旗頭として、一三代藩主徳川慶藏没後、幕府からの養子を排し、慶勝擁立を実現した人物である。

書写したのは、天保四年とあるから、田宮の没後、代替わりしたばかりの如雲から貸与してもらったようである。『名古屋市史 人物編一』によると、田宮が子孫にむけて、職務を第一に考え、文武に重きを置き、趣味に財産を使うことなく、奉公に専心せよ、という言葉を残しているとされている。田宮は名奉行と呼ばれていたから、「子孫」に向けた誠めを自ら実践したといえるだろう。次に、田宮による前書をみてみたい。

敬公御行状御実録をはじめ都而官府の御記録を抄出する事ハ恐れあり、此書ハ只世ニ普く伝る処の記録野史より抄出して書集たれハ誤多かるへし、されハ誤を人に伝えてハ御徳を汚し奉ることも有んかと、是を恐れ、亦官府の御記録をもて訂さんこともなりかたけれハ書集しまゝにて秘し置ぬ²⁷

この書は尾張藩の藩庫にある記録類ではなく、義直について、すでに世に広まっている記録・野史を集めて編纂したも

のであるという。前書にあるように、田宮が秘していたのは誤りがあることを恐れていたことであつた。

『敬公遺事』では、勤王や国学に偏することなく、徳川義直の生い立ちやそれにまつわるエピソード、著作の紹介、儒学、軍学など、義直の思想を多面的に捉えている。また、義直の著作から長く引用している。ここではまず、「君戒」からの引用をみていきたい。「君戒」の内容はあとで詳しく考察する。田宮は、どのような観点から「君戒」を捉えているのだろうか。

一、正公へ被進たる御書付のよし左に記す

「此書は段々写し伝へたるを又写したれハ²⁸

伝写の誤も有へし猶として訂すへし」

「正公」とは二代藩主光友である。田宮は義直が自分の後を継いで藩主となる光友に向けて書き進めたものとしており、尾張徳川家という「家」の観点によるものである。「君戒」は全文が掲載されている。『敬公遺事』は全八九丁であり、そのうち「君戒」は八丁分に相当する。つまり、田宮が非常に重要視していたことが窺える。また、傍線部のように「此書」「君戒」は何度も書き写されており、尾張藩内で書写

で広がっていたことがわかる。

そして、『敬公遺事』には次の義直の著作一覧がある。

一、御著述の書左之通

東照宮御年譜 来切記

御系図 御伝記

初学文宗 類聚日本紀

神祇宝典 軍書合鑑

軍書粹言 軍証志

中臣稜抄⁽²⁹⁾

あとでみる西村の『尾張敬公』のなかの義直の著作一覧とほぼ同じである。『神祇宝典』『類聚日本紀』以外に、家康関連書、軍書など注目すべき書物があげられている。

次に尾張藩内での義直の思想像について、どのような言説を収録しているのかを見ていきたい。これは尾張藩士・天野信景『塩尻』からの引用である。

一、天野信景『塩尻』に云、寂林院の少将「上総介、源忠輝」難波の役に御家臣皆陳⁽³⁰⁾を出し軍の終る事をしらす、互に不知案内の事共多くしてふつりあひけるを、他州の兵士に笑はれ侍りしと或記録にあり、戦国の時、殊に神

君の御子にてましませしかは、かゝる拙き事有へき事ともおほへさりしが、或老耆曰、我是を聞り、忠輝朝臣常にあしけなく渡らせ給ふのみにて、為師の器ましまさりし（中略）あゝ戦国武辺の名有といへとも、独身働きに尠とたるのみに深く兵要を曉らさる者は、いつとてもなくそあるへき、是我敬公『軍書合鑑』を御述作ありて御子孫にも伝へ御家人にも軍旅ひん習の心得をつけさせ給ひし、され共今当府の人、読み知之者有共きこへ侍らす、さすが二先君の遺書に御志は留りて有なから、御家之臣僕として其書目をだに不知、過なん事を顧ぬ事ハ、さらにもいはし、且恩禄を食ひながら、御家の軍書を知らざるは、恐るへき第一なりけり、新参の人はともあれ、御譜代二めしつかハれたる人は、此御一書および『初学文宗』を八家々に納め、戸／＼に読奉りて先君の御遺訓を守り奉るへき事なり⁽³¹⁾

ある老人の話が語られている。傍線部のように『軍書合鑑』が子孫、御家人たちに対して、心得させる書物と説明し、御家の軍書を知らないのは恐るべきことと述べている。また、波線部のように、代々家臣として仕えてきた人は『軍書合鑑』

と『初学文宗』を家に納め、「先君」＝義直の遺訓を守るべきと述べている。以上から、天野においては尾張藩、御家において『軍書合鑑』と『初学文宗』が重要視されていたことが読み取れる。別の引用もみていこう。

一、木枕物語二曰

義直公神仏の二道を兼、文武両道に備ハらせ給ひて、武士を撫、民を憐み、名將の誉に叶はせ給ひける、深く酒をも好ませ給ハねは、酔の御侮もなく常に花にめてさせ給ハねは、色の御まとひもなく、制法廉直にして国ゆたかに賞罰正敷、仁政にして民常にあんし、天下の為ニハ異国の周公ニ等しきと世挙て申奉りける、国々の諸侯も此君の御国法にめてさるはなし云々⁽³¹⁾

「木枕物語」とあるが、これは国書データベースにある「木枕」もしくは「木枕双子」であろう。江戸中期に成立したもので、右の文章は、最初の挿話「丞相公仁政事」のなかにある。「丞相」とは丞相に次ぐという意味で、朝廷の官職でいうと大納言を指す。つまり、この話は、義直が大納言になったとき以降のものである。「敬公」が義直の号であることはすでにふれたが、正式には「二品前丞相尾陽侯源敬」と

いう神号に基づく。

まず、傍線部に注目したい。義直が藩の制度を整え、儒学の「仁政」を実践し、領民が安んじており、それは、中国の理想の統治者である「周公」に等しいといわれていたという。また、波線部に注目すると、義直は神道のみならず、仏教にも通じており、文武両道を備えた「名將」であるという。つまり、義直の思想に関して、神、仏、儒の三教に通じ、文武を備えていたとする「木枕」の記述の部分を抜き出していることがわかる。これは、田宮の義直像と重なるからであろう。以上のように、「敬公遺事」は神道や勤王に偏することなく、儒学、仏教、軍学、文武その他、義直の思想の多様性を示している。とくに、統治者としては、儒学の仁政が強調されていることが指摘できるだろう。

二 西村時彦『尾張敬公』と思想像

1 西村時彦『尾張敬公』の成立過程と思想像
近代以降の義直像の画期は、西村時彦⁽³²⁾が記した『尾張敬公』である。いま、近代以降と述べたが、西村が膨大な史料を渉

獭して著した、義直の思想像の決定盤ともいえる本である。

西村は、号を天囚といい、晩年は碩園と号した。幕末の慶応元年（一八六五）、大隅国種子島西之表に生まれる。幼少期から漢学、宋学、経学などを学び、東京大学文学部附属古典講習科漢書課に官費生として入学。小説から新聞記事に至るまで幅広く執筆活動をした。加えて、日清戦争に従軍し戦記を連載、また、『日本宋学史』を執筆したことも知られる。

『尾張敬公』は、西村の「附記」によれば、明治四二年（一九一九）一〇月一五日から二月一日までの「大阪朝日新聞」連載を、一九一一年、名古屋開府三百年記念会から出版することになったという。『尾張敬公』の構成は、前半が「出生」から清洲越の「遷府」を通じて、大坂の陣の「軍旅」までが年代順の伝記であり、後半が「文学」以降、「武事」「政道」「性行」「家訓」「尊王」などテーマ別のエピソードとなっている。

さて、西村はどのような動機で『尾張敬公』の執筆に当たったのであろうか。「序説」で西村は、次のように述べている。

（義直は）教育上より尊崇すべき大人なるは勿論、豈史

学上より見ても研究すべき名公に非ずや、然るに其事蹟を記しゝ者は、旧尾藩儒臣深田正韶の著なる稽徳篇の世に行はるゝ外、未だ專書あらずして、未顕の事實猶多きは、誠に遺憾とこそ謂ふ可けれ。

予れ夙に本朝儒学の源流を尋ねて、徳川氏文教の盛なるを嘆美し、風氣の先を開きし敬公の卓識を欽慕して、其の事蹟を研究せんとは志しつれども、暇なくて果さざりしが、四十三年の春には、名古屋の士人敬公の為に開府三百年祭を行ふと聞き、斯る機会にこそとて、徳川侯爵家に請ふ所あり、其の快諾を得て、敬公に関する資料を借覧しつ、或は写し或は抄して此の編を作れり、是れ偏に侯爵家の嘉惠なり、斯くと聞きて資料を寄寄せられし故老も亦多く、或は写本、或は先君前哲の筆跡、何くれとなく、蒐集展観せしめられしは、藩祖を思慕して功德を表彰せんとする余なるべし、忠厚の至とや謂ふべき、予は此に深く其の芳情を感謝するに³⁴なん。

傍線部のように、西村はまず義直を「教育上」において「尊崇」すべき人物とし、さらに「史学」においても研究すべき名君であると評価している。また、世間には深田正韶

「稽徳篇」^(傳) 以外に義直に関する専門的な書物が無い、というのは、「稽徳篇」は明治二十四年（一八九一）に觀成社から刊行されたので現在、活字本として義直の事蹟にアプローチできるのが、「稽徳篇」のみという意味であろう。ただし、「稽徳篇」は諸名君の事蹟を明らかにしたもので、全三巻のうち、「東照宮」家康が九巻を占める一方、「敬公」義直は第一五巻の一巻分しか収録されていない。

いずれにせよ、西村は名古屋開府三百年となるうとしているのに、その開府の祖・義直の事蹟が、現在、未だ多くが明らかにされていないことを嘆いている。また、波線部では、日本の儒学の源流を研究していくなかで、義直の業績に行きついたことが読み取れる。儒学については、たとえば、別の箇所、上野忍岡に徳川家の儒学の祖ともいふべき、林羅山が林家の聖廟＝孔子廟を建立したとき、義直が尽力したことを「崇儒尊師」、儒学と師としての羅山を尊崇することが厚かったからだと述べている。実際、義直は林家に孔子像を寄附し、孔子廟に「先聖殿」と題した額を奉納したという。

名古屋開府三百年記念会は、出版理由を次のように述べる。

源敬公幕府の懿親を以て、封に尾張に就きしより、爰に

三百年矣、星移り物換はり、幕政廢れて王政復古^(傳)の世と爲り、而かも名古屋市民が藩祖敬公の遺徳を仰慕するの深く旦切なる、宛も敬公世に在るの日と異なる無きは何ぞや、惟ふに名古屋市が三府に垂げる大都市として今日の殷賑繁華を致し、商工業の勃興、文学美術の隆盛、共に他府県を凌駕せんとするの概ある所以のもの、実に藩祖敬公が荊榛を拓き阡陌を開きて、名古屋市の基地を爰処に相し、学を勧め業を励まし徳を樹つことの深き、功を垂るゝことの久しきに職由するを以なり、名古屋市民が今春三府二十八県連合共進会の開催に際し、開府三百年祭を営まんとするの意も、亦先志を紹述して以て

皇恩に答へんと欲するのみ、此時に際し、天因西村君が藩祖敬公伝を撰ひて、大阪朝日新聞紙上に連載し、幽を聞き微を顕はし、市民をして公の遺徳を仰慕するの念を新ならしめたるは、我が名古屋市民の感激する所なり、因りて今同君に請ひ、更に之を印刷に附して、普ねく江湖に頒ち、以て藩祖の遺徳顕揚の一助に資す、若し夫れ同君が史学家として、操觚者として、現時の文壇に何如なる位置を占めつゝあるやは、世既に定評あり、今復之

を贅せず。

明治四十三年三月

名古屋開府三百年記念会³⁶

ここで注目したいのは、四角で囲んだ言葉である。「王政復古」や「皇恩」など天皇に関わる言葉が使用されている。西村の意図とは別に、維新後、「王政復古」により王権が天皇家にうつり、天皇制国家となったという認識を示し、また、開府三百年祭も、天皇への「皇恩」に報いるためだという。いわゆる皇国史観的な要素を読み取ることができる。つまり、名古屋開府三百年記念会側は義直をより皇国史観のなかに位置づけようとしていると考えられる。名古屋の開府三百年祭を開催しようとする時に、西村が義直の伝記を大阪朝日新聞に連載していたと記している。また波線部では、出版にあたり、「普ねく江湖に頌ち」義直の功績を知ってもらおうとしたと述べている。

これに対して西村の義直へのまなざしは、皇国史観一本槍ではない。

大人君子の気象は、剛大にして而も温穆、厳正にして而も惻怛なり、（中略）然れば正しき道を履み、勇ましき

志を立て、有為有用の士たらんと願ふ者は、常に大人君子の風采を望んで、無言の教訓をだに其の気象に得んことを欲するなるべきも、目の前其の人に遇ひ易からざるを奈何にせん、是に於て之を史伝に求めて、其の人と為りに私淑せざるを得ず、茫々たる上下数千年、聖賢あり、英雄豪傑あり、君子の儒忠烈の士あり、其性の近き所を喜び、其志の同じき所を尚びて、隔世の師友と為すに、如何なる人物か求めて得ざらん、但し人心を感化することの切実なるは、近古の偉人に若く莫し、是れ耳近くして人心に入り易ければなり、予れ之を徳川氏の初に求めて、尾張の源敬公を得たり。³⁷

傍線部では、「有為有用の士」であることと願う者は、常に「大人君子」の風貌や無言の教訓でさえも得ようとする。しかし、実際に会うことは難しいため、その規範となる人物を史伝に求め、ひそかに尊敬し、模範として学ぶものだと述べている。西村はその「大人君子」を義直としている。ここで想起したいのは、日本の儒学の源流を遡っていた西村が、義直を研究すべき人物として突き当たったということである。

ここで改めて、『尾張敬公』の章構成について言及してお

きたい。ここでもっとも多くの分量を割いているのは「文学」で一五項目である。そのうち、儒学に関する項目数が、神道に関する項目数より多くを占めている。西村は確かに義直に皇国史観につながるような神道的な要素を見いだしているものの、とくに、藩政に臨む義直については、儒学を重視している。

また西村は義直を次のようにも記している。

明治奎運の盛なるは、徳川氏三百年の文教に淵源す、徳川氏三百年の文教は家康の胎謀に出づるも、其の志を紹承して其の業を羽翼せし幕初の諸名公なくんば、争でか學術の勃興當時の如きを得ん、幕初の諸名公とは、曰く尾張の源敬公、曰く紀伊の南龍公、曰く水戸の西山公、曰く備前の芳烈公、曰く会津の保科神公等是なり、此の人々は皆幕府の親戚にして、学を好み儒を崇び、慶元以降万寛の際に至るまで、文教を羽翼して休明の運を開き、其の名当時に輝きて後世に光れるが、中にも源敬公こそ學術純粹、内行修潔、撰述甚だ富み、徳業尤盛に、敬神尊儒の識見卓然として風氣の先を開かれたりけれ、幕初諸名公の魁とや云はん、独り其の嘉言善行は後人の

服膺すべき教訓なるのみならず、明治奎運の淵源なる徳川氏文教の興隆に大関係あり、特に親藩の随一として尊王の大義を遺訓したるが如きに至りては、意料外の事実とも謂ふべく、風教の上に大功あること敬公の如きは希なり

傍線部に、「慶元以降万寛」とある。これは慶長・元和より万治・寛文年間の「名公」つまり、名君について論じたものである。西村は、江戸時代初期の名君を、「南龍公」＝紀伊藩徳川頼宣、「西山公」＝徳川光圀、「芳烈公」＝岡山藩池田光政、「保科神公」＝会津藩保科正之の四君としている。そして、その名君の基準は儒学による仁政に置かれている。西村はそこに義直を加えて五名君とし、その基準をやはり「儒を崇び」とあるように、儒学に置いている。それだけではない。義直を「敬神尊儒」として、これら江戸幕府創業当初の名君の「魁」、先駆者としている。

ところが、波線部では、「親藩」において「尊王」＝天皇を敬つことの「大義を遺訓」した点を高く評価している。ここでは、儒学ではなく、「尊王」の観点から評価し、江戸時代の近松や山田の勤王像、また、名古屋開府三百年記念会の義

直像に寄っているように見える。これは「敬神尊儒」という評価とも矛盾しているように見える。そこで「明治奎運の淵源」とあるのに注目したい。「奎運」とは学問や文事の発展というほどの意味である。西村は、明治維新以降、日本が天皇制国家になったことを前提として「尊王」の観点を押し出している。つまり、江戸時代における義直の思想像は、「敬神尊儒」の観点で評価し、とくに、民政においては儒学の仁政を重視する一方、明治維新以降、西村が生きている当時の観点では「尊王」を重視しているといえるだろう。

2 「勤王」史観による思想像の変遷

そもそも西村は、義直の「尊王」についてどのように理解しているのか。『尾張敬公』には「尊王」という章があり、そこに次のように記している。

神祇を敬い儒術を尊びて、文数を興し風気を開きし敬公が、幕府に恭順なると共に皇家を尊崇し、心を朝典に留め物を禁中に献ぜられしは、以て大義を尊び名分を重んぜられしを知るべく、撰述の諸書、往々其の意を寓すといふ、善く其遺書を読みて微言を尋繹し、遂に敬公尊王

の秘蘊を發せし者は、実に四代立公なり、立公の侍臣なりし近松茂矩の著に、円覚院様御伝十五箇条と題する一冊子あり、立公の直話を筆記せし者なるが、中に左の一条あり、曰く

御意に、源敬公御撰の軍書合鑑卷末に、依「王命」被「催事」(後略)³⁹⁾

傍線部では、義直自身の思想として、やはり「敬神尊儒」の観点から評価し、また朝廷と幕府との関係においては、いわゆる「尊王敬幕」の観点で評価している。一方で、「尊王」については、「円覚院」すなわち、四代藩主吉通に着目し、近松の「円覚院様御伝十五箇条」を念頭に置いている。つまり、義直の著作・思想というよりは、尾張藩徳川家という大名家の文脈で義直の「尊王」精神を位置づけているといえるのではないだろうか。

さて、『尾張敬公』以降の義直像はどのように変遷していくのだろうか。

例えば、大正四年(一九一五)に名古屋市教育会が刊行した『済美帖』がある。この本は、「御即位大典の記念として、名古屋及び之に深き関係のある人物の遺芳を伝へんが為に編

纂せり」⁽⁴⁰⁾つまり、大正天皇の即位式と大嘗祭を記念する主旨で刊行したという。そして、徳川義直の項目では、「其勤王の志の篤きは、著書軍書合鑑の末条に明なり。(依王命被_レ催事₄₁)」と述べている。つまり、「軍書合鑑」の「依王命」のみを取り上げ、義直の「勤王」について述べている。

ここで、尊王と勤王のニュアンスの違いについて言及しておきたい。尊王は天皇を尊ぶ気持ちであり、⁽⁴²⁾勤王は天皇のために忠義を尽くすといった、より実践的な行動が伴うことである。つまり、尊王よりも勤王の方が、よりボルテージが高いといえるだろう。

また、昭和十三年(一九三八)、三月一九日から二一日にかけて、市立名古屋図書館で「郷土勤皇事績展覧会」が行われた。⁽⁴⁴⁾図録も出版されている。「依王命」についても展示があり、「尾藩勤王精神の淵源」⁽⁴⁵⁾と説明している。また吉通の「円覚院」も展示され、より義直の勤王の精神を強調する内容になっている。

二つの事例から、『尾張敬公』以降は、「敬神尊儒」から神道的要素を切り離し、尊王ではなく、勤王の思想を強調した義直像がつくられる傾向が窺えるのではないか。

戦後の出版物においてはどうかだろうか。結論からいえば、「依王命」からの影響がある。昭和五四年(一九七九)に高木元韶が著した『尾張武人物語』では、以下のように述べられている。

義直がかく大義に明るかつたのは、平生日本書紀を研鑽し、敬神の信念の厚かつたところからきたものであった。義直はみづから神祇宝典十巻、神道正宗一冊を撰し、また類聚日本紀百七十四巻を著した。義直は道としては儒学を尊んだが、その師とした林羅山がすでに神儒合一の傾向にあり、その侍講とした堀杏庵また国典に通じてゐて、さういふところから自から斯に至つたものであらう。(中略)近世儒学興隆上の欠くべからざる功績者であるが、その学問攻究の方向が儒学にあらずして神道にあり、日本書紀を尊重したといふことはその純乎たる日本人魂を表白してゐるものであらう。(中略)

かうした好学の結果、義直はおのづと有職の道に通じ、朝廷の礼式を重んずるやうになった。(中略)礼式はこゝとにそれが朝廷のものであるから固くこれを厳守したのであつて、剛直なその性格とともに、朝廷尊崇の精神の

凛たる發現をみるのである。

高木は傍線部のように義直の学問の研究対象が神道であった、それは日本魂を表していると述べ、波線部のように朝廷尊崇の精神が義直に發現したと記している。

他にも、『幕末の尾張藩』では次のように述べている。

藩祖義直以来の尊王論の影響が強く働いている。彼が選述した『軍書合鑑』の巻末に「王命によって催される事」

の一条があり、「今日の位官は朝廷より任じ下され、これは朝廷の臣なり。我等が主君は今上皇帝なり。公方は旗頭なりと宣いし由、然ればいかなる不測の変ありて、保元・平治・承久・元弘のごとき事出で来たりて、官兵を催される事あるときは、いつとても官軍に属すべし。

一門のよしみを思つて、かりにも朝廷に向つて弓を引くことあるべからず」と延べられている。この考え方は四代

藩主吉通の解釈で具体化されるとともに、水戸光圀にも受け継がれて、水戸家で発展し、徳川斉昭を通して慶勝も感化されたと考えられる。

傍線部のように、「依王命」の件が引かれている。そして、その内容を朝廷が「官軍」を起こしたときには、「官軍」に

属すべきであり、朝廷に手向かつてはならないと解釈している。その上で、波線部のように、この考え方は、義直本人のもので、それを具現化したのが四代吉通であるとされている。さらに、斉昭経由で慶勝に受け継がれているとしている。

三 庭訓にみる義直の思想―儒学と軍学―

1 義直の著作について

ここでは、義直の思想像ではなく、思想がどのようなものであったのかを、義直の著作のうち、庭訓に注目してみたい。本題に入る前に、義直の著作について、改めてみておこう。これは西村の『尾張敬公』が参考になる。「文学（十）」という項目のなかで、次のようにまとめられている。

敬公撰述書目（悉皆未刊）

○神祇宝典 十冊

○神道正宗 一冊

○類聚日本紀 七十冊

○成功記 十八冊

源氏の始祖貞純親王に始まりて家康薨去に終り、乃父の功烈を

表彰せし者也。

○御年譜 五冊 乃父家康の年譜にして、正保三年四月十五日の序あり。

○御系譜 一巻 徳川氏の系図にして、四代將軍家綱の正保任官に終る。

○祖父物語 一冊 清須の喜左衛門といふ老人の物語りし故事の聞書。

○軍書合鑑 一冊 片仮名軍法の書。

○軍証志 三冊 古合戦の批評。

○軍書萃言 一冊 兵書の拔萃。

○初学文宗 一冊 人生れてより七十歳に至る迄の心得にして、庭訓の書なり。

○君戒 一冊 一名御宝訓。⁽⁴⁸⁾

『神祇宝典』、『神道正宗』、『類聚日本紀』など神道の著作の他、『成功記』、『御年譜』、『御系譜』、『祖父物語』といった父家康や、徳川家に関する著作がある。加えて『軍書合鑑』、『軍証志』、『軍書萃言』といった軍書も丁寧にまとめた。一見すると、儒学に関するものは見当たらないようだが、儒学は庭訓書『君戒』、『初学文宗』に入っている。

このうち、本稿では『軍書合鑑』、『君戒』、『初学文宗』に注目する。これらは義直が子孫、つまり、尾張藩徳川家を継ぐ子孫に語り遺した庭訓書だからである。『軍書合鑑』は書名からは庭訓書のようには見えないが、後述のように庭訓書に含めるべき書物である。

なぜ庭訓書なのか。その理由は「はじめに」で述べたように庭訓書には、義直「個人」の思想というよりは、義直が考えるべき尾張藩徳川家の思想をみることができないのではないかと考えるからである。

2 『軍書合鑑』について

義直の子孫に向けた教訓について、西村は「特に子孫の為に書残されしは、君戒一篇と初学文宗一卷⁽⁴⁹⁾としている。つまり、庭訓は「君戒」と「初学文宗」ということになる。ところが、『敬公遺事』では、『軍書合鑑』と『初学文宗』の「御遺訓」を守るべきと述べている。

三書とも、制作年は不詳だが、庭訓書という性格を考えると、仮に上限を長男光友が誕生した寛永二年（一六二五）あたり、下限を没年の慶安三年（一六五〇）としておきたい。

まず、『軍書合鑑』が庭訓としてもみられるのかどうかを検討する。西村は「○軍書合鑑 一冊 片仮名軍法の書」⁵⁰としている。実際に『軍書合鑑』の前文には次のようにある。

予本朝ノ軍記ヲ考ヘ、漢朝ノ武書ヲ関テ、人ノ嘲ヲカヘリミス、此書ヲ作りテ、予力便トシ、且又子孫ノ為ニ庭訓ヲノコサント仮名ヲ以テ、コレヲノヘ一巻ノ書トナシ、名ツケテ軍書合鑑ト云⁵¹

いうまでもなく、「予」は義直である。義直は「本朝」＝日本の「軍記」と中国の「武書」を参考にして、『軍書合鑑』を著したという。「人ノ嘲ヲカヘリミス」というのは謙遜である。日本の軍字・兵法が中国の『孫子』『呉子』『六韜』『三略』から出発しており、和漢の軍書に通じていることは常識である。江戸時代には『和漢軍書要覧』が出版されている⁵²。したがって、『軍書合鑑』は軍書なのだが、傍線部に注目すると、その軍書を子孫の庭訓のために遺したと明示している。西村は、『軍書合鑑』を「片仮名軍法の書」とも読んでいるが、そのカタカナは子孫に語り遺すために用いたというのである。つまり、『軍書合鑑』はいわば、庭訓軍書なのである。さらに、次のように続いている。

此書ヲヨムモノハヨク心得アルヘシ、予力志ストコロハ、是ヲ用ヒテ国ヲ治メンカ為也、カツテ乱ヲコノムニハラス、ヨリノ二此ヲ慮リテ忘ル、コトナカレ、若ヲコタラハ、良将ノ名ヲ取ルコトカタカルヘシ、孫子ニモ兵八国ノ大事ナリト云ヘリ、誠ナルカナ敗スル時ハ国ヲ亡シ、家ヲヤフリ、身ヲ失フ、大事是ニ過タルハアラシ⁵³

冒頭の「此書ヲヨムモノ」とは尾張藩徳川家を継ぐべき子孫である。この軍書は、戦乱のためではなく、治国のためであるという。この軍書・軍字を治国・統治に応用するというあたりは、若尾政希が明らかにした、『太平記評判秘伝理尽鈔』を彷彿させる⁵⁴。治国の「良将」とは、治者としての名君に通じるだろう。戦乱のみならず、治国の心得を忘れれば、「国ヲ亡シ、家ヲヤフリ、身ヲ失フ」という。つまり、尾張藩徳川家という国家を滅ぼし、また、藩主としての地位も失うという。ここからも、『軍書合鑑』は子孫が「国家」をいかに存続させるかを主題にした庭訓であることがわかる。

この国家が尾張藩徳川家という「家」であることは、義直の父である家康についても記載されていることからわかる。

吾父家康公ハ三州ノ一郡ヲタモチテ、自ラ軍ヲシ玉フコ

ト、百タヒニアマレリ（中略）公ノ武ノ道ニ達シ、良将タルカ故也、其子孫トシテ此道ヲ忘レンハ、大キナル不覺ナラン、故ニ是ヲ記セリ、見ン者ヨク此理ヲ考ヘハ、其味キハマリナフシテ、身ヲ終ルマテ用フルトモツクシカタカルヘシ⁵⁵

家康は「二郡」を保つために百戦したという。そして、傍線部のように自分の子孫が、父家康の武の道を受け継ぐために、『軍書合鑑』を記したという。

『軍書合鑑』本文の前半部分の内容は、国家や戦いについての行動、良い大将などについて細かく述べており、その典拠に『孫子』、『呉子』、『尉繚子』、『司馬法』、『太宗問对』（唐太宗李衛公問对）⁵⁶、『六韜』、『三略』といった、多くの中国の兵書が置かれている。加えて、関ヶ原の戦いや長篠の戦いなど、多くの合戦から引き出した心得が記されている。

本文の後半は、次のような内容である。

右ハ和漢ノ軍書ヲ考ヘ、軍ノ大ムネヲトク、予又サラニ其キハマル所ヲ慮リ、己力心ヲツケテ別ニコレヲノス⁵⁶
 ここまでの部分では、軍書を考察して、「大将」のありかたについて説いてきたが、ここからは、自分の気づいたこと

つまり、ここまでの部分から引き出した教訓を書いていくという。「別」というのが、このあとの部分のことである。

このあとの項目は、「士ヲ精事」、「約ヲ堅フスル事」、「賞罰ヲ重フスル事」、「勝負ヲ知ル事」、「軍之事」、「謀ヲ以テ軍ヲスル事」、「軍ヲ入ルゝ事」、「淫酒ヲ禁スル事」、「逸楽ヲ禁スル事」、「乱妨狼藉之事」、「神社仏閣ヲ破ル事」、「城二楯籠事」、「金鐵普代ノ兵ヲ以テ軍ヲスル事」、「集勢ヲ以テ軍ヲスル事」、「大軍ヲ以テ小軍ヲ打事」、「小軍ヲ以テ大軍ヲ討ツ事」、「依王命被催軍」となっている。この項目から、『軍書合鑑』が軍術的な事だけではなく、「士ヲ精事」、「賞罰ヲ重フスル事」など家臣団統治について、つまり、治国について書かれていることがわかる。大将の行いを中心に解説していく。

士ヲ精事

士ヲ精ト云ハ、仮初ニモ臆病ノ名ヲトルコトナカレト云
 コトヲ士卒ニハケマスヘシ、忠アツテ死スルハ、士ノ本意ナルコトヲ、常ニ告ギカシメ、死スヘキ所ニテ逃ルゝ者ハ禽獸ノ類、先祖子孫ノ面ヲヨコシ、不孝不忠ノ者ト云コトヲ、ヨリ、ニ説聞カスヘシ、又イカニモ士卒ヲイカメシキ様ニナスヘシ⁵⁷

まず士卒を励ます事が述べられている。士卒が大将に忠誠を励まし、臆病せず死ぬのは「本意」であり、死所から逃げたものは「先祖子孫」、つまりは「家」の顔を汚す不孝不忠の者と述べている。君臣関係の忠だけでなく、儒学の根本思想である孝の論理、つまり、「家」の論理が見てとれる。

淫酒ヲ禁スル事

淫酒ヲ禁スルハ、大将色ヲ好ムトキハ、必ヲコタリ謀ヲコタルモノナリ、其上士卒モマタ将ニ習テ色ヲ好メハ、自武芸スタレ、京家ノ人ノ如シ、故二大ニコレヲ禁スル也⁽⁸⁾

義直は大将を士卒の規範として考えている。大将が性欲・飲酒にふけるのは軍略を怠るので、禁じるべきである。それだけではなく、士卒は大将に習うもので、武芸が廃れ、京家、いわゆる公家のようになってしまうという。

神社仏閣ヲ破ル事

神ハ古ヨリ尊フニ依テ、誓紙ヲモ破リカタシ、神社ヲヤキヤフルトキハ悪行ノ人ナリトテ、士卒ヲモヒ付ス心替リノ者モ自然ト出来ルモノ也、仏閣ヲヤキヤフルトキハ、其子孫ノ位牌等、又ハ尊フ仏像モアレハ、自ラ其国ノ者

怨ヲフクムモノ也、堅ク制札ヲ出シテ乱入セサルヤウニスヘシ、然トモ敵神社仏閣ニタテコモリ、火ヲ放シテ利アルトキハ早く火ヲカケ焼失フヘシ、又敵国ニ入テ城アリコレヲ攻ルニ、先ツ城主ノ強弱ヲキク、城ノ要害ヲキク、要害アシキトキハ、先ツ是ヲ攻テ取ヘシ、城堅固ナラハ攻ル器ヲヨクト、ノヘテセメヨ⁽⁹⁾

義直は傍線部のように、神は昔から尊いもので誓紙も破りたいものと述べている。また、仏閣を焼き払う時は、子孫の祖先の位牌や、尊い仏像があるので、仏教を信心しているその国の者たちの怨みをかうため、制札を出して乱入させないようにするべきとしている。たとえ、敵の国の寺社でも尊いものとし、配慮が必要としている。しかし、寺社に敵軍が立て籠もっている場合は、それを焼き払って利があるときは躊躇なく火を放てという。これは後段の記述の籠城を攻るときに心構えに通じているからであろう。

このように『軍書合鑑』の内容をおさえたうえで、改めて問題の「依王命」を検討したい。煩瑣になるが、「依王命」を再掲する。

夫催二応シテ軍ヲスルトキハ、常ノ義ニスコシ異リ異リ

ト云フハ、味方大軍ニシテ王ノ命アリトイヘトモ、諸將心々ナリ故二軍ヲセント見ツクラウトキハ、人先ヲスル故ニ、吾武コレニヲトルコレ生涯ノヒケナリ、手勢ヲミタサ、ル様ニ、次第々々ヲ追テハヤク軍ヲスヘシ、是モヨボサル、軍ノ大法ナリシカレトモ、敵ヨキ險阻ヲ前ニアテ、シカモコハクハ君ニ使ヲツカハシ告ヘシ、其下知ニヨツテ軍ヲスル、コレモ一ツノ法ナリ、此道ヲ常ニヨク慮ルヘキコト也、軍ヲスルハ医師ノ病ヲ治スルカ如シ、古今ノ書ヲ考ヘテ療スト云ヘトモ、病ヲ見ルコトアヤマルトキハ、カヘツテ大キナルアヤマチアリ、兵ヲ用ルモノ軍ヲ見ヲホセス、モツハラ書ヲ用ヒテ軍ヲセント思ハ、敗ヲ取ヘシ、此書ヲ見ル者ヨク其慮リヲナスヘキ事也^(四)

『軍書合鑑』の性格を分析した上で、「依王命」を読んでいるこころ。一軍を率いる大将の心構えについて述べられていることがわかる。傍線部に「王」があるが、この王は朝廷や天皇とは読み取れない。また、この軍は「官軍」「官兵」といった天皇の軍隊というようにも読み取れないのではないか。ここでは、王の命による大軍であっても、戦が始まりそうにな

ると、諸将が思い思いに先駆けようとするところがある。そのときに、どうするか。一つは、手勢をまとめて、遅れを取らないように、いつでも攻められるようにする。もう一つは、大軍をまとめる主君の下知で一斉行動するように、主君に告げる。それは、相手の陣形次第である、という。

戦を指揮するためには、医師と同じで、医書をみて診断するのではなく、患者の病気をみるのが大切で、波線部のように、戦も軍書だけで頭で行えば、必敗であるという。つまり、『軍書合鑑』の「依王命」は勤王や尊王といったイデオロギーをまとっておらず、大将の実用的な戦術論である。すでにみたように、近松がこれを「疎略」としているのは、近松が軍立ては勤王・尊王といったイデオロギーから出発すべきだと考えていたからなのではないだろうか。

以上のように、義直は『軍書合鑑』を通して子孫に軍事における良き大将から、国を治めるための大将へ繋げ、治国の統治主体になるように示唆をあたえていた。『孫子』をはじめとした様々な兵書・軍書や歴代の合戦知識を用いて、武将としての心構えを「元和偃武」、戦がなくなつた徳川幕藩体制にいかに関係するかを、子孫により具体的に伝えようとして

いた。つまり、尊王や勤王の精神ではなく、大名として治国を行うための身の振り方を語っていたのである。

3 「君戒」における君主あり方

蓬左文庫所蔵の「君戒」⁽⁶¹⁾は江戸初期に写されたものとされ、「御宝訓」と題が附されている。当初は秘本として一般には知られてなかったという。「君戒」という題は後から尾張藩の参政・人見璣臣がつけたもので、やはり写しには「御宝訓」と題されているとしている（本稿では、全て「君戒」と統一）。形式は、一つ書で、一二条記されている。

一、君たる事は、万民をしたがへ、民の心ざしを見る事なり。君のかうせきあしければ、民したがはず。上にはしたがふといへども、大事に及んではいづれもそむくものなり。其上、君のかうせきをまなび、国の風にいたるまで、皆あしくなるものなり。かるがゆへに、君のかうせき、ひとりある所をつゝしめば、臣下も其身をつゝしめ、法礼をみだらず、法礼をみだらざれば、国家よくおさまるものなり。⁽⁶²⁾

まず、君主とは万民を従えて、その民の心ざしを見る事で

あるとする。また、君主の行いが悪ければ、民は従わない。君主がひとりよがりにならないければ、国家はよく治まるとして、君主の行いが重要であることを示している。これは、『軍書合鑑』の大將と士卒の関係を彷彿させる。大將が規範となり、士卒を率いることを、治国に応用しているのである。また、君主が慎めば臣下も慎むという。この慎むとは、儒学の「大学」の「君子は必ずその独りを慎む」に拠っているはずである。こつう君臣関係で法礼をまもれば治国がうまくいくという。

一、かうせきは常に学の心をよく知るをかんやうとするなり。然れども、心を其道によせて、臣下にまみゆる時は、先これにたいめんして、其品々によつて其ことばをかけ、其人により物語をする。学をすればとて、この事におこたれば万事にあしき也。いはんやよの事におめてをや。⁽⁶³⁾

「かうせき」は行跡ではないか。君主の行跡として「学の心」をよく知ることが肝要であるという。「其道」は「学」であろう。この「学」は儒学を指していると思われる。しかし、学問に心をうばわれてはならない。実際に、臣下に対面したときは、相手に応じて言葉をかけるべきだという。「学」

をしているからといって臣下に合わせた対応をしなければ、全てのことは悪くなるとしている。つまり、臨機応変に臣下に接することをもとめている。

実は、この箇所も『軍書合鑑』の「依王命」と通じている。すでにみたように「依王命」に医師と患者の関係を例に「軍ヲスルハ医師ノ病ヲ治スルカ如シ、古今ノ書ヲ考ヘテ療スト云ヘトモ、病ヲ見ルコトアヤマルトキハ、カヘツテ大キナルアヤマチアリ、兵ヲ用ルモノ軍ヲ見ヲホセス、モツハラ書ヲ用ヒテ軍ヲセント思ハ、敗ヲ取ヘシ」と述べられていた。つまり、軍においても君臣関係においても、書物から得た知識のみで現実を動かすことを禁じて、状況のなかで行動する柔軟性が求められている。これは次の「げいのうの事」の誠めにも通じている。

一、げいのうの事しらざれば野人におなじ。しかる時はすこしは知りたるもよし。然れども其道はおもしろきにより、実なる事をば次にするものなり。其心をもつて能たしなむべき事なり。⁶⁴

「げいのう」とは大名が嗜む茶道や能楽などを指しているのである。そうしたことを知らなければ教養のない人と同

じであるとし、少し知るのがよいとしている。しかし、「其道」が面白いからと、心を奪われ、実際の事をおろそかにしてはならない。そのように心得て嗜む程度をかんがえよ、というのである。次の「道具」においても同様である。

一、わかきときは、物をもてあそぶに心あるべき事なり。多分の人、すぎの道具、いろ／＼のもののずきなる物を見てはほしく、又はこしらへ度ものなり。先武士の道具を拵ゆるはしかり、其外にはこのまざるものなり。是わかし時のたしなみ也。⁶⁵

ここでは若い時の嗜みを示している。この「道具」も茶道具などの風雅なものを指しているのであろう。そういうものに若い頃は慾心が動くが、まずは武士の道具を拵え、その他は好まないとすることが嗜みとしている。

一、臣下たるもの、いさむる時まづ君のあしき事をいふものなり。かるがゆへにいかる心有ゆへに、気色にあらはるゝものなり。又君のかうせきの事をいへば、近臣かれに告たるかとおもひ、心よこしまに成て、我行跡をなす事をばおもはずして、たれか告たる、此ものをつみにおこなはんとおもふ心悪敷なり。第一に気色をよくし、

先あいさつをよくつくるもの也。其心は、臣下として、君にいさめをいふ事は大なる忠なり。朋友に悪敷おこなひある時は、いけんをいふ事さへ成がたきものなり。君にいさめをいふ事は、人々此事を悪敷とおもふを聞いていふか、又いさむるものの心に悪敷とおもひていふか、よくおもひおもんはかつて聞入べき事なり。我理十が七つあつて、此事をいひわかんとおもへば、必あらそふものなり。あらそへば、臣下たるもの君にいさむる事をせず。いさむる事をせざれば、せい人たるといふとも其人かならずほろびん。⁶⁶

ここでは臣下の諫言について記載している。より正確には、諫言を君主がいかに関心を受け止めるか、君主の心構えについて述べたものである。君主を諫めることは大きな忠であるとし、もし臣下が君主に諫めることをしなければ、聖人といわれる人でも必ず亡びるだろうと述べている。諫言は君主の悪しき所を批判するものであるから、それを聞くと怒りの感情があらわれるという。そこでどう工夫すべきか。傍線部に注目したい。諫言の際、君主は顔色をよくし、まず挨拶を受けるものとしている。これと酷似した内容が『山鹿語類』⁶⁷に記され

ている。『山鹿語類』とは山鹿素行⁶⁸の談話を門人が編集した江戸前期の儒学書である。『山鹿語類』には次のように諫言について記している。

○納諫言

（前略）百官の諫を聞き、万民の誹謗を以て人君の諫とするは、人を畏るゝの戒め也、人主の威は雷霆よりすさまじく、其勢は万鈞よりも重し、己を虚にしてひらき導て諫を求め、顔色をやはらげて言を受るとも、人猶云うことをやすしとせず、若己を立て知を銜て非をかざらば、誰か諫を可_レ言乎⁶⁹

『山鹿語類』も「君戒」と同じように諫言を受ける際に、顔色を和らげると述べている。山鹿素行の生没年は元和八年（二六二）～貞享二年（二六八五）であり、義直とほぼ同時代の人物である。いま山鹿素行との接点は詳らかにしないが、なんらかの接点があったのではないかと考える。

一、武家にむまるゝものは、をくしたりとおもはれぬやうに、たしなむべき事なり。常のものがたりにも、いくさの物がたりなどある時は、たに心をよせず、こつずいに入て是を聞、あいさつするにも其心もつていふものなり。

其理をさとらざれば、臣下といへども、君をおくしたると思ふものなり。此物がたりの中に、きつなる事有ともしばらくはなしおはつてより座をたつべきなり。又人により、いにしへの事をきかずとも、そのばにおよばば、かつせんのはかりごとをすべきなどゝいひて、いにしへの事をもきかず、まんずるものは、おもひよらざるひけをとるものなり。いにしへの事を聞るんずる時は、かならずよきはかりごともので、天下のほまれをとるものなり。此だんにいたつては、かたかつゝしむで、こつずいに入ておもふべき事なり⁽⁷⁾。

ここでは、武家に生まれる者の嗜むべきこととして「いくさの物がたり」いわゆる軍書・軍記などの物語があるとき、よく理解して聞けとしている。また、傍線部には合戦の謀をすべきといって、昔の事も聞かず、慢心する者は思いもよらない敗北すると述べている。これは、実践で得た経験を重視しているのではないだろうか。義直は『軍書合鑑』だけでなく、『軍証志』、『軍書萃言』などといった書物を編纂しており、軍書を重要視していた。

以上から、「君戒」は子孫に君主の立場を主として書かれ

たものであった。前にみた『敬公遺事』を作成した田宮が子孫に残したとされる言葉は、文武に重きを置くことや趣味に財産を使わないというようなものだったが、ここには、「君戒」との類似性がある。また、これも前に述べたように『敬公遺事』には「君戒」を全文掲載している。これらのことから、田宮が「君戒」の影響を非常に受けていたといえる。これは尾張藩徳川家を君臣ともども存続し、栄えさせていくという共通の意識があつたからではないだろうか。

4 『初学文宗』における義直の「家」意識

『初学文宗』も徳川義直の著作として知られており、秘蔵本であつたとされる⁽¹⁾。序文には次のように記されている。

夫、学の事は難きにあらず。人生の日々に用ひ行ふ処、是皆学の道なり。今の人此理を知者少し。学問と云へば、愚なる者の成べき事あらずとて、聞べき事ともせず。故に愚なる者はいよいよ愚にして、道を知ことなし。我是をいたみ思ふ故に、人始て生しより七十以上までの間、心を正し、身を修め、国家を治め、其外、官職・礼法・軍旅・葬祭に至るまで、仮名を以て是を書付て一卷と成

て、是を初学文宗と名付。蓋し初学の人をして、大道の一端を知しめんと思ふ心なり。⁷²⁾

傍線部のように、「初学文宗」と名付けたのは義直である。文宗とは優れた文学家・文章家というほどの意味だが、ここでは「大道の一端」、道の入門というような意味で用いている。序文の後には懷妊から七〇歳まで行うべきことを、ライフステージごとに記している。

そして波線部に内容が記されているが、実際のコンテンツは若干異なっていて、「孝行之事」、「身を修る事」、「軍事」、「国を治る事」、「礼法之事」、「官位之事」、「神社之事」、「葬之事附祭之事」、「惑之事」という順番で、これらを仮名交じりの文で記している。

ここで、注目したいのはコンテンツの順番である。まず、最初に「孝行之事」が置かれていて、次いで「身を修る事」と続いている。「身を修る」とは儒学の修身で、そこから自己修養がはじまるわけだが、その前提として「孝」を置いているのである。実際、本文中には父母が君臣よりも上、「忠」よりも「孝」を上位に置く意識が窺える。一般に、封建主従関係を幕藩体制の基礎におく江戸時代では、「孝」よりも

「忠」が重んじられていた。⁷³⁾「孝」の徳目を「忠」より上位におくのは、やはり、この書が庭訓、つまり子孫に向けられたもので、尾張藩徳川家という「家」の存続を意識しているからであろう。また、序では「身を修る事」と「国を治る事」と連続しているが、実際は、その間に「軍事」という項目を挟んでいる。いったい、「修身」から「治国」へ繋げず、「軍事」を挟んでいるのはなぜだろうか。この点を念頭におきながら、具体的に「初学文宗」をみていこう。

一、十一歳より十五歳まで、馬に乗り、弓を射ることを教べし。学問をさせ、人と争ひをせず、慢がちな心を戒む。淫乱の道を堅く制す。礼法を習はしむ。父母に孝をし、君に忠を致し、朋友に信をなし、臣を使ふことを習はすべし。⁷⁴⁾

年齢ごとの段階で、例えば、「論語」では一五歳は「志学」とされ、学問に志す⁷⁵⁾とされる。「初学文宗」では傍線部のように、乗馬と弓が推奨されている。一見、武道を重視しているようにみえるが、後半の波線部「礼法」においては、孝忠信といった儒学的思想を述べている。ここでも最初に「孝」が置かれている。儒学思想と武士の世界を接合しようとして

いることがよくわかる部分である。

年齢ごとの記載の後には『論語』、『礼記』、『書経』、『呉子』、『史記』、『大学』、『列女伝』、『孟子』といった儒学書、兵法書、史書から引用されており、様々な書物知識を蓄え、武士世界と繋げて書き残している。

身を修る事

身を修むるは、其心を正つするぞ。其心を正しつする
と云は、其意を誠にするぞ。其意を誠にせんと思はゞ、
其知をいたすぞ。知をいたすことは、其物々によりて誠
の道をよく思へ。かくの如く存する時は、国をも治め、
家をも育るぞ。(中略) 幼君に仕へて、万づ我心のまゝ
に事を行ひ、君を守立たる人、其君長成の時は心得ある
べきことなり。いつも幼き時と同じことに思ひて君を窺
ふ心なく我まゝに振まふは、必災難に逢なり。臣下たる
人此慎みなければ、其身を失ふのみにあらず、君を仁恩
すくなしと思ふ者あるべし。又大臣亡びぬれば、国家の
為にもよからぬ事なれば、人君に仕る者は、先づ我身を
修る道を以て第一の要心とするなり。我身を失ん事を思
ひて、君の為に悪きことあれども諫ることなく、君の為

によきことあれどもすゝむることなし。斯の如くなるときは、家をも亡し、国をも亡し、我身も損し害ふこと多し。又諫て死する時は身を修めずと云者にはあらず。⁷⁶

傍線部では、身を修める「修己」、知を致す「致知」といった基本的な朱子学⁷⁷の考えが見て取れる。このように身を修めれば、国を治め、家も斉うとしている。朱子学では「修身」

「斉家」「治国」という順番だが、ここでは「治国」

「斉家」となっている。これはあとで「国家の為」という言葉があるように、尾張藩徳川家という「国家」を念頭に置いているからではないか。

波線部は、君主が幼い場合の心構えで、家臣、たとえば家老主導で主君をもち立てることが必要だが、成人してからは主君の意向をうかがうべきだという。また波線部以降は、家臣においても「修身」が必要で、それは「国家」を存続させるため、的確な諫言をするためであると論じている。

次に、すでに触れたように、修身と治国に挟まれた「軍事」に何が書かれているのかを見ていきたい。

軍事

夫、軍法は第一に身を修る事、次に人をする事、次

に国を堅くする事。昔衛の靈公問「陳於孔子」、孔子対曰、
 狙豆之事則嘗聞之矣、軍旅之事未_レ学_レ之也と宣へり。
 軍法とて道の理に違ふことなし。然るを、礼法を指置て
 先づ陳を問へる故に、孔子こたへ玉はず。軍も礼をおさ
 めて諸軍と心を一つにせざれば成事なし。諸軍と心を一
 つにすると云ば、常に心の私なく、仮にも偽を行はず、
 己に誇り、人を慢る事なきなり。

次に人を知と云は、其言行をよく見よ。其言は正しけ
 れども、其行ひ私あらば、小人と思ひ用ふることなかれ。
 又臣を使ふには、其器のまゝにするなり。器のまゝにす
 るとは、任_レ賢使_レ能と云て、其人々の長じて得たる所を
 試み見て、品々の役を司らしむ。若其器に当らざれば退
 けて、別人をよく択て用ふべし。(中略)

次に、国を堅くすると云は、民を使には耕作の際をよ
 く考へて使ふべし。或は人の疲れたるときは使ふべから
 ず。民は極て愚なる者なれば、殊更よく教べし。此三の
 者をよく心に懸て行ふ時は、四方の者随ひ帰せずと云こ
 となし。或は敵を攻る計は、先敵と我との強弱をはかり
 見て、敵のたてをよく察し、敵国の難易広狭、或は道

の案内をよく窺ひ知り、敵の大将の行跡を聞て、利ある
 べき所を我國にてはかり知らば、即ち出馬に及ぶべし。⁽⁷⁹⁾
 傍線部のように「軍法」は三つの事柄、すなわち、修身、
 人を知ること、国を堅くすることが肝要であるという。修身
 については、『論語』『衛靈公』が引用され、波線部のように、
 儒学の「道の理」も軍法も同じことで、指揮者と家臣が「礼
 法」を守り、心を一つにすべきことが説かれている。次に人
 を知るとは、人事のことである。適材適所に配置するために、
 その人物をよく知るべきだという。国を堅くするとは、領民
 の用い方のことで、破線部のように、農耕の間を考えて使
 うこと、また、領民には教化が必要であるという。ここには、
 農本主義的な考えが見られ、農業や農村生活を立国の基礎と
 して、義直は強く認識しているのである。

『孫子』がいうように「兵は国の大事」である。「軍事」と
 いう項目名だが、ここでは、大事＝非常時に備えて、平時に
 いかにか家臣団を統制し、領民を教化し、国を堅くしておく必
 要があるのかが説かれているのである。

国を治る事

国を治るは政を以てするぞ。これを斉するに刑を以て

すれば、民免んとして耻をしらぬぞ。徳義を行て、礼を以て教ふるときは、民耻を知て、邪なることを思はず。

凡君たる人位高ければ、諸臣是を恐れ憚故に、諫を申す者なし。諫を聞ざれば、身の誤をしることなし。されば人をよく懷けて諫の言を用べきなり。君惡ければ、よき

臣下これありといへども、国を治ることなし。殷に箕子・

微子・比干と云て賢人ありと云へども、紂、諫言を聞ざれば則其国亡ぶ。楚の懷王、屈原を用ひずして、卒に秦

に囚れたり。故によき臣下あれども、諫ることを聞ざれば、其国必亡ぶ、家に諫る子なければ、其家必亡ぶ、国

に諫る臣なければ、其国必亡ぶといへり。（中略）

又或は、大なることを行ふ時は小しきなることを用ひしめず。故に大行不顧細瑾と云へり。されば、国君

の心あしければ国民必苦む。王の心あしければ天下必なやむ。大人の心一つを以て天下の民喜ぶ。又あしければ

苦む。其心を治めざれば、国を治むることなけん。故に

「家仁一国興、仁、一家讓、一国興、讓、一人貪戾、一国作乱」

と古語にも見えたり。誠に国を治むる事は、先徳を以てし、法を以てするぞ。夫、徳法は民を御するの具なり。

（中略）人臣の君を侮と思へば怒りつよし。其怒りに恐

れて諫を申者なし。君の身をよく修めて身正しければ侮らず。又、人臣侮らば、身の修あしと思て、よく我身

を省み、其身を正しくせよ。其身正しければ少も侮ることなし。⁸¹

治国は「政」による。その最初に民衆統治が挙げられている。法刑主義ではなく、「徳義」と「礼」による。徳義はす

でに見たように、為政者が慎み、身を修めることで徳を身に

つけることである。「礼」は儒学の五常の一つとして、人の道として踏み行なうべき規範である。為政者の仁徳によつて

民衆に望み、民衆を統治する、徳治主義といえるだろう。また、例えば、傍線部のように「君戒」と類似した箇所もみら

れる。諫言については「君戒」以上に中国の例が多用され、より詳しく説得力が増している。ここでも、諫言が君主、国の存続に関わるとしている。

「大行不顧細瑾」は「史記」からの引用である。意味は、大事業をなしとげようとする者は、小事や欠点を気にせず、に物事を行なうということ。「大行」する者は誰か。それは波線部のように「国君」「王」である。「古語」に「家仁一

国興^レ仁、一家讓^一国興^レ讓、一人貪^レ国作^レ乱」とあるのは『大学』からの引用である。「国家」の政・興亡は、国君の心一つにかかっている。ゆえに、諫言が不可欠なのである。最後に、神道に造詣が深いとされる義直が、神社・神についてどのように語っているのかをみよう。

神社之事

神は敬め遠ざくるを本とするぞ。神に私の利を申すは大なる過ちなり。神に祈る事は、父母・君長・国民の義を祈るぞ。私の事をかく祈ることなかれ。周公も武王の病の時に身を以てかはらんことを祈り、湯王は早魃の時に神に向て祈る。此皆理に当りたる所なり。神は非礼を享ざることなれば、私の利を以て祈とも如何ぞ達せんや。

昔、帝堯の華に至り玉ふ時に、華の封人の云く、我帝の為に寿長くましますんこと、大に富玉はんこと、男子多く儲け玉はんことを、神に祝して参らすべしと申しければ、堯堅くいなみて受玉はず。其時封人申しけるは、此三の者は皆人の欲し願ふ所なり、君何ぞ是を辞し玉ふやと申す。堯の曰く、男子多ければ懼多し、富ときは事

多し、寿長ければ辱多し。是皆徳を養ふ所の者にあらずと宣へり。富貴・寿福・栄禄は天の与る所、求て得べきに非ず。故に孔子の曰、獲罪於天則無所^レ祷也と云⁽²⁾。

聖言堯の心と合せり。実に私を祈らざること明かなり。驚くべきことに、義直は、傍線部のように、神は敬して遠ざけるにしかず、と述べている。つまり、『神祇宝典』『神道正宗』に類することは、ここでは出てこない。問題となっているのは、神に何を祈るか、ということである。周公も武王も、自分のことではなく、他者のために祈った。いわば、利他主義である。つまり、自分の利のために、神に祈つてはならない、と諷めている。また堯の例は、封疆の番人が堯のために神に祈るうとしたところ、堯が自分は徳を養つ者である。天がわれに与えるところに従つまでだ、と寤めた、という話である。線で囲んだ「獲罪於天則無所^レ祷也」は、『論語』「八佾」からの引用である。天に罪を得れば、祈つても無駄である、という意味である。

以上のように『初学文宗』は全体に儒学的思想が強く押し出されている。それは、尾張藩徳川家という国と家、つまり、国家が強く意識されているからである。

おわりに

様々な学問に通じ、国家の存続のため多くの著作を残した義直であるが、死後、再び官位を贈られている。名古屋開府二百五十年祭が行われた明治三十三年（一九〇〇）に正二位が贈られたという。『尾張敬公』にはその際の宣命を記載している。

天皇の天命に坐せ故権大納言従二位徳川義直の墓前に宣給はくと宣る汝命大朝廷の御楯と為て其が領れる地の公民を治め武の道を講く暇種々の書を撰みたる中に宗とは勤王の訓を子孫に貽し励まし遂に故慶勝をして其が功を成さしめたるは正しく明き真心となも思ほし食す故今年二百五十年の祭に値り其が大きい功績を万世に旌表さむと為て特に正二位を贈り給ひ位記を賜ふ是を以て愛知県知事正四位勲三等冲守固を差使て如此の状を宣給はくと宣る

明治三十三年五月七日⁸⁹

傍線部では、義直の命が朝廷の「御楯」となったと語った

上で、治国や武芸、著作について述べている。また、ここでは、「勤王の訓を子孫に貽し」と義直の庭訓に勤王の要素を見出している。そして、波線部でその庭訓から慶勝が討幕派になったとしている。しかし、これまでみてきたように、少なくとも義直の著作の庭訓『軍書合鑑』『君戒』『初学文宗』では、勤王思想を鼓吹してはいなかった。

義直の勤王という思想像は、明治維新・戊辰戦争を境として、慶勝の行動と結びつけ、広げられ、近代以降、強められていった。しかし、それは明治維新後に作られたものではなく、すでに、江戸時代において、近松による四代藩主吉通の言説として、作為されていたものであることを確認した。具体的には「円覚院」によって、「依王命」を勤王的に解釈してそれが藩内で伝えられていた。また、幕末においては、岸野がすでに言及しているように、国学者の山田千嘯の「国美論」で「勤王」視点からの義直像を作りだしていた。こうしたものが、戦前の出版物の源流になったと考えられる。

これらに対して、田宮の『敬公遺事』では儒学や軍学、武芸、神道などがバランスよく配置され、さらに、「君戒」を全文掲載していることからわかるように、より「国家」を

意識した義直像が展開されていた。また、近代の義直の思想、および、伝記の画期といえる『尾張敬公』も「尊皇」という項目をたてているが、そこに収斂せず、「敬公遺事」同様に、儒学をはじめとする義直の多様な思想を明らかにしていた。

このように思想像の変遷をたどったあと、義直の庭訓書『軍書合鑑』『君戒』『初学文宗』から思想を分析した。いずれも子孫に「勤王」もしくは「尊皇」を語り遺すような著作ではなく、どれも君主や大将など上に立つ者としての振る舞いや武家のあり方を読み取ることができた。つまり、庭訓書においては、初代尾張藩主として子孫に「国家」の存続、尾張藩徳川家を長く存続させ、尾張国を治めていくことが第一に置かれていた。

本稿では、限られた史料で、義直の思想像と思想を考察してきた。義直に関する史料はほかにあるので、それらの史料を広く調査・分析する必要がある。また、義直は庭訓のほかにも、多くの著作を残している。それらの著作と庭訓との関係や、軍学と儒学の関係など、さまざまな観点からより深く義直の思想を分析することが、今後の課題である。

注

- (1) 徳川美術館『開館65周年記念 尾張家初代徳川義直生誕四〇〇年 秋季特別展 徳川義直と文化サロン』（徳川美術館、二〇〇〇年）参照。
- (2) 以下、「徳川義勝」については『国史大辞典』（林董一執筆）九八頁～一〇六頁を参照。なお、本稿において、『国史大辞典』『日本国語大辞典』『日本人名大辞典』の引用はジャパン・ナレッジからである。
- (3) 以下、「尾陽神社」については「発展 良縁ノ神 尾陽神社」<http://biyoujinja.com/>（二〇一三年二月三日閲覧）を参照。
- (4) 西村時彦『尾張敬公』（名古屋開府三百年記念会、一九一〇年）二二頁
- (5) 西村同前 西村の附記と目次の間に、発行者、すなわち丸山信太郎が寄せた文章。
- (6) 以下、「近松茂矩」については名古屋市教育局委員会『名古屋叢書 第一巻文教編』（名古屋市教育局委員会、一九六〇年）「解説」五～八頁を参照。
- (7) 以下、「円覚院」については、名古屋市教育局委員会同前を参照。
- (8) 以下、徳川吉通については「一五 徳川吉通」名古屋市『名古屋市史 人物編一』（川瀬書店、一九三四年）四二～四三頁を参照。ただし、『名古屋市史 人物編』の引用は、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/>

info:ndljp/pid/1145342 (二〇二二年二月一日閲覧)

- (9) 徳川義直『軍書台鑑』名古屋市蓬左文庫所蔵。請求番号一
二八 四十二
- (10) 岸野俊彦『幕藩制社会における国学』(校倉書房、一九九
八年)一九頁を参照。
- (11) 名古屋市教育委員会前掲注(6)『文教編』三三―三四頁
- (12) 以下、山田千疇については岸野前掲注(10)一六五―一六
九頁、一七五頁を参照。
- (13) 岸野前掲注(10)一二頁
- (14) 山田千疇『国美論附録』、『棕園叢書』収録(名古屋市蓬左
文庫所蔵、請求番号 山 四)
- (15) 岸野前掲注(10)一二頁
- (16) 徳川美術館『尾張の殿様物語』(徳川美術館、二 七年)
- (17) 岸野前掲注(10)一二頁
- (18) 『契沖』、『国史大辞典』(大久保正執筆) 参照。
- (19) 山田前掲注(14)
- (20) 水野雄司『直霊から直毘霊へ 本居宣長における思想変化』
『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』四、二 一四
年
- (21) 岸野前掲注(10)一八五―一八八頁を参照。
- (22) 山田前掲注(14)
- (23) 田宮半兵衛『敬公遺事』(中京大学文学部所蔵)
- (24) 以下、田宮半兵衛については「三 田宮半兵衛」名古屋
市前掲注(8)二五六―二五七頁を参照。
- (25) 以下、田宮如雲については「田宮如雲」『国史大辞典』(林
董一執筆)を参照。
- (26) 名古屋市前掲注(8)二五六―二五七頁を参照。
- (27) 田宮前掲注(23)
- (28) 田宮同前
- (29) 田宮同前
- (30) 田宮同前
- (31) 田宮同前
- (32) 『儒学』『日本国語大辞典』 参照。
- (33) 以下、西村時彦については「西村天囚」『国史大辞典』(北
根豊執筆)を参照。
- (34) 西村前掲注(4)三―四頁
- (35) 西村同前 序論一―二頁
- (36) 『皇国史観』『日本国語大辞典』 参照。
- (37) 西村前掲注(4)一―二頁
- (38) 西村同前 二―三頁
- (39) 西村同前 二〇五―二〇六頁
- (40) 名古屋市教育会『済美帖』(名古屋市教育会、一九一五年)、
ただし引用は、国立国会図書館デジタルコレクション、
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/963902> (二〇二二年十
二月十四日閲覧)
- (41) 名古屋市教育会同前
- (42) 『尊王』『日本国語大辞典』 参照。
- (43) 『勤王』『日本国語大辞典』 参照。

- (44) 名古屋市立名古屋図書館『郷土勤皇事績展覧会図録』（郷土勤皇事績展覧会図録刊行会、一九三八年、ただし引用は、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1172531>（二〇二一年十二月十四日閲覧））
- (45) 名古屋市立名古屋図書館同前
- (46) 高木元裕『尾張武人物語』（歴史図書社、一九七九年）二一三～二二四頁
- (47) 櫻井芳昭『幕末の尾張藩』（中日出版社、二〇〇八年）一四七頁
- (48) 西村前掲注（4）七九～八〇頁
- (49) 西村同前 一七二頁
- (50) 西村同前 七九～八〇頁
- (51) 徳川前掲注（9）
- (52) 近世の軍書事情に関しては、井上泰至『近世刊行軍書論』（笠間書院、二〇一四年）に詳しい。
- (53) 徳川前掲注（9）
- (54) 若尾政希『太平記読み』の時代（平凡社、一九九九年）
- (55) 徳川前掲注（9）
- (56) 徳川同前
- (57) 徳川同前
- (58) 徳川同前
- (59) 徳川同前
- (60) 徳川同前
- (61) 以下、「君戒」については名古屋市教育局委員会前掲注（6）
- 「解説」一～三頁を参照。
- (62) 名古屋市教育局委員会同前「文教編」一～四頁
- (63) 名古屋市教育局委員会同前
- (64) 名古屋市教育局委員会同前
- (65) 名古屋市教育局委員会同前
- (66) 名古屋市教育局委員会同前
- (67) 「山鹿語類」『日本国語大辞典』参照。
- (68) 「山鹿素行」『国史大辞典』（尾藤正英執筆）参照。
- (69) 山鹿素行『山鹿語類 第一 巻第一 一二 君道第一 一二』（国書刊行会、一九一〇 一九二一）、ただし引用は、国立国会図書館デジタル、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991317>（二〇二一年二月一五日閲覧）
- (70) 名古屋市教育局委員会前掲注（6）「文教編」一～四頁
- (71) 「初学文宗」については名古屋市教育局委員会同前「解説」三～四頁を参照。
- (72) 名古屋市教育局委員会同前「文教編」五～一七頁
- (73) 三宅正彦『幕藩主従制の思想的原理』（日本史研究）二二七、一九七二年
- (74) 名古屋市教育局委員会前掲注（6）「文教編」五～一七頁
- (75) 「志学」『日本国語大辞典』参照。
- (76) 名古屋市教育局委員会前掲注（6）「文教編」五～一七頁
- (77) 「致知」『日本国語大辞典』参照。
- (78) 「修身齊家」『日本国語大辞典』参照。
- (79) 名古屋市教育局委員会前掲注（6）「文教編」五～一七頁

- (80) 「農本主義」『日本国語大辞典』参照。
- (81) 名古屋市教育委員会前掲注(6)「文教編」五、一七頁
- (82) 名古屋市教育委員会同前
- (83) 西村前掲注(4)二三三頁。なお万葉仮名はひらがなに改めた。

(中京大学文学部歴史文化学科卒業生)